

2) 徳川慶喜・英仏公使との謁見

- ▶ 慶応3年12月14日(1868年1月8日)、徳川慶喜はイギリス公使ハリー・パークス、フランス公使レオン・ロッシュとの謁見を行います。
慶応3年12月7日すなわち西暦1868年1月1日は兵庫開港と大坂開市が施行されるため、各国の外交官が大坂に来ていました。そのような中、慶喜が偶然に大坂城に入城したため、両国は謁見を要請し、慶喜はそれを受け入れたのでした。
謁見は、大坂城本丸御殿内御白書院で行われました。
慶喜は、これまで京都で起こった出来事について説明し、領地返還には従わないことや大坂に移った理由などを明らかにしています。

3) 徳川慶喜・外国公使との謁見

- ▶ 慶応3年12月16日(1868年1月10日)午後3時、大坂城本丸御殿内白書院にて徳川慶喜と外国公使との謁見が行われました。
外国側の参加国はイギリス、フランス、アメリカ、オランダ、イタリア、プロシアです。
幕府側は、慶喜をはじめ松平容保、松平定敬、板倉勝静(老中)、松平正質(若年寄)、牧野貞明(大坂城代)と多くの目付けでした。
慶喜は、①自分の政策 ②京都からの撤退理由 ③列藩会議の決定事項に従う意思表示 ④外交事務は自分が担当する 等を伝えました。
このとき、パークスは、慶喜の決断力の欠如を感じ、指導者としての適格性に疑問を覚えたようです。

4) 鳥羽伏見の戦い

- ▶ 慶応4年1月3日(1868年1月27日)、京都で鳥羽伏見の戦いが始まります。
1月4日に大坂土佐堀にある薩摩藩蔵屋敷が焼き払われます。
1月6日には旧幕府軍の敗北が確実となり、兵が大坂城を目指して退却してきます。
新選組も最初は八軒屋の京屋忠兵衛方に入っていましたが、1月7日大坂城二の丸に入り、負傷者の治療を受けています。



新選組 副長 土方歳三

5) 徳川慶喜 大坂城を脱出

- ▶ 敗北が決定的となった慶応4年1月6日(1868年1月30日)、午後10時頃、徳川慶喜は重臣(松平容保、松平定敬ら)を従わせ、大坂城を脱出します。
天満八軒屋から舟で天保山沖へ向かいます。
開陽丸に乗り込み、1月8日夜に投錨し、江戸へ向かいました。
各国の外交官たちは危険を感じ、大坂開市にあわせて造られた外国人居留地(川口居留地)に非難します。



6) 大坂城の焼失

- ▶ 旧幕府軍は慶喜の逃亡により総崩れとなり、大坂城に立てこもって一戦するという事態は避けられました。
城代監察と官軍代表の尾張藩への城明け渡しの儀式が予定されていたようですが、慶応4年1月9日(1868年2月2日)、不審火が上がり、火は2日間消えず、大坂城は焼失してしまいます。



<大坂城の炎上>

豊臣期の大坂城焼失では徳川政権が安泰となり、幕末期の大坂城焼失では、薩摩・長州を中心とする天皇政権の安泰へとつながっていきます。

大坂城焼失後の模様

<「アーネスト・サトウの日記」より>

[慶応4年1月23日(1868年2月16日)]

「(前文省略)門を通りすぎると、あたり一面荒涼たる景色であった。内濠のところの櫓と壁はなくなっていた。南側の外壁のところにあった兵舎と櫓もすっかりなくなっていて、残っているのは城の右側に出る門のところの石だけであった。(途中省略)

巨大な石を敷いた門をくぐって、本丸に入ってみた。ここでも残っているのは石造りの部分だけで、(途中省略)本丸の建物自体は跡形もなく姿を消し、ここにかけて建物があつたことを示すのは、崩れた瓦で厚くおおわれた平らかな地面だけであった。(以下省略)」

⑩ 明治期の大阪城 ～陸軍の軍事拠点～

1) 大阪鎮台の設置

- ▶ 明治2年(1869)5月、五稜郭の戦いが終わり戊辰の役が終結します。兵部大輔に任じられた大村益次郎(長州藩出身)は、8月中旬京阪地区に出張し、新政府の基盤となる軍事施設を精力的に定めていきます。

大阪城内には、陸軍施設(大阪鎮台・兵学寮・兵器工場)を設置するよう命じ、早速同年の8月に大阪鎮台が設置されます。

この施設が、後に起こる西南の役において、鹿児島氏族の反乱を鎮圧する根拠地となります。

鎮台は明治21年(1888)の兵制改革により、第四師団と改称されます。



兵部大輔 大村益次郎

2) 兵学寮(陸海軍の士官学)の開校

- ▶ 明治2年11月に客死した大村益次郎の遺志を継ぎ、明治3年4月、大阪城内の二の丸京橋口内側に兵学寮青年学舎(陸海軍の士官学校)が開校されます。



兵学寮青年学舎

3) 造兵司(のちの大阪砲兵工廠)の設置

- ▶ 陸軍直属の兵器製造工場で、大砲などの重兵器、爆弾などを造る施設です。大阪城内の青屋口付近に設置されました。



大阪砲兵工廠



4) 西南戦争勃発

- ▶ 明治10年(1877)2月、西南戦争が勃発すると、大阪鎮台兵が初めて戦闘に参加します。前線基地となったこの地に、負傷兵が次々と運び込まれてきます。大阪陸軍臨時病院を設立し、負傷兵の治療を行います。同年3月31日、明治天皇が内閣顧問官である木戸孝允を従えて訪れ、入院患者を見舞いました。

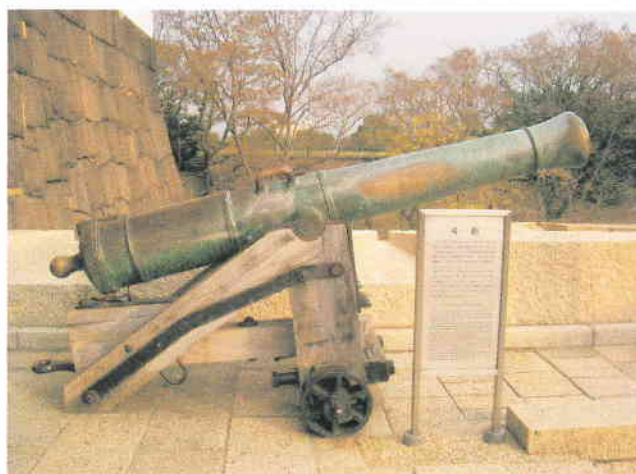
5) 紀州御殿

- ▶ 明治18年(1885)、和歌山城二の丸にあった御殿の一部が大阪城内に移築されました。陸軍の兵舎として使用され、通称「紀州御殿」と呼ばれました。紀州御殿は、昭和8年(1933)天皇の行在所となり「天臨閣」と改称されています。



6) 時報を告げる大砲

- ▶ 大阪天保山砲台にあった大砲が、明治維新後大阪城へ移されてきました。明治3年(1870)から時刻を知らせる号砲として用いられるようになりました。最初は1日に3回でしたが、明治7年(1874)以降はお昼の正午のみ大阪市内を空砲が轟きました。「お城のドン」「お午(ひる)のドン」という名で親しまれていましたが、大正期になり火薬の節約等の理由から空砲は中止となりました。今でも勤務(仕事)が午前中みの場合「半ドン」という言葉が使用されています。



⑪ 大阪城天守閣の再建 ～大阪市民の寄付金により再建～

1) 大大阪記念博覧会の第二会場

- ▶ 大正14年(1925)3月15日～4月30日に「大大阪(だいおおさか)記念博覧会」が開催され、天王寺公園を第一会場に、大阪城を第二会場として開催されました。
※大阪市は隣接する東成・西成両郡の町村と合併し、人口200万人を超える国内随一の大都市となり、「大大阪(だいおおさか)」と呼ばれました。

2) 豊公館

- ▶ 前記1)のとおり、博覧会の第二会場が大阪城で開催されました。このとき、天守台に二層の仮説建物が建てられ、「豊公館」と名づけられました。豊公館の外観は、桃山様式に則って造られました。1階は豊臣秀吉の遺品や、その時代の歴史資料が展示され、2階は展望台となっていました。豊公館には、わずか45日間の会期間中にもかかわらず、69万8386人の入場者がありました。豊公館の人気の、のちの天守閣復興につながっていきます。



豊公館



3) 天守閣の復興が議会で可決

- ▶ 昭和3年(1930)11月、昭和天皇即位の式典が行われるにあたり、大阪市の記念事業として、寛文5年(1665)1月の落雷で焼失して以来約270年間失っていた天守閣の復興が、第7代大阪市長 関一(せき はじめ)より大阪市会に提案され、満場一致で可決されました。

現市長の関 淳一氏は、関 一の孫にあたる。



第7代 大阪市長 関一 像

4) 寄付金の募集

- ▶ 昭和3年8月から寄付金を募集し、早くも翌年の2月に目標額の150万円に到達しました。最も多く寄付をした人は、住友財閥の住友吉右衛門氏で25万円。続いて、三菱財閥の岩崎小弥太氏で5万円でした。

5) 天守閣再建の問題点

- ▶ 大阪城内は明治以降、陸軍の軍用地となっており、あらゆる施設が所狭しと建っていたため、一般の市民や観光客が、自由に入出入りすることは困難であると予想されました。そのため陸軍からいくつかの条件が出され、それを認めるということで再建が進められました。その条件とは、募金額の6割を新庁舎の新築に充て、残りの4割を天守閣再建・大阪城公園の整備に充てること。また、いざという時は天守閣を軍部に明け渡すということでした。新築された第四師団司令部の庁舎は、戦後、進駐軍の本部、大阪市警察本部と移り変わり、大阪市立博物館として2002年3月31日まで利用されていました。

6) 大阪城天守閣の再建

- ▶ 天守閣の建設は昭和5年(1932)5月6日に起工し、翌年の10月30日に竣工しました。(約270年ぶりに天守閣が復興しました。)豊臣期の天守閣の復興が望まれ、数少ない資料から現在の天守閣が設計されました。竣工式典は、昭和6年(1931)11月7日に行われ、同月16日から一般公開が始まりました。